

明治大学教養論集 通巻395号

(2005・3) pp.127-146

「思い出」が「わたし」に語りかける

—— アンドレアス＝ザロメの自伝『人生回顧 人生における
幾つかの思い出の輪郭』におけるフロイト派精神分析と
自伝書法との関係についての一考察

広 沢 絵里子

1. 『人生回顧』と『輪郭』

一般に『人生回顧』と呼ばれている自伝テキストでもって、その著者ルー・アンドレアス＝ザロメ（1861年、聖ペテルブルク生まれ—1937年、ドイツ・ゲッティンゲン没）は、「理解可能な」明瞭な輪郭を持った自己像を打ち立てることはできなかった。むしろ、結果はその反対であり、彼女の生は今日でもまだ「謎」として人の好奇心を掻き立て、伝記文学マーケットの中を流通しているように見える¹⁾。

『人生回顧 人生における幾つかの思い出の輪郭』というタイトルで、遺稿からアンドレアス＝ザロメの自伝テキストが最初に出版されたのは、著者の死後十四年が経過した1951年のことだった。著者の友人として遺稿を譲り受け、その管理者となったエルンスト・プファイファーは、著者が生前『輪郭 (Grundriß)』²⁾と呼んでいた本編十章、補遺一章（『輪郭』に欠けている事）からなるテキスト群に、この自伝計画とは異なる文脈において成立した著者の晩年のエッセイ二編を加えて一冊の本とし、『人生回顧』という題名をつけた。『輪郭』の方はその際、副題に退いたのである³⁾。『輪郭』は、著者の晩年、1931年から32年にかけて書かれたものであり、著者は、

ももとは死後の出版を考えていたものの、ニーチェとの関係を明らかにすべきとの外的圧力から生前出版の可能性も考慮せざるを得ず、フロイトに、「国際精神分析出版」からの出版の可能性を打診したこともあった⁴⁾。その後も、発表時期は未決定のまま、原稿にはかなりの推敲が重ねられていたことから、遺稿に含まれていた『輪郭』の原稿は、出版を前提とした一定のコンセプトのもとに仕上げられていたと考えて良い⁵⁾。プファイファーが、1930年代以降、第二次世界大戦終結までの間に完全に忘れ去られた女性作家アンドレアス＝ザロメをもう一度世に出そうと、戦中戦後の混乱期に守り抜いた遺稿から、最初に出版したのが『人生回顧』だった。プファイファーがアンドレアス＝ザロメ独自の、なんらかの文学的構想に即した校訂を心がけるよりも、彼女の文学史・文化史における重要性をできるだけアピールするための編集方法に傾いたとしても、その動機には一定の理解を示すことができる——結果的にプファイファーは、アンドレアス＝ザロメ自身の本文を凌駕しかねない大量の注釈をつけ、彼女のリルケとフロイトに関する、文体的には『輪郭』草稿のそれとは全く異質な印象を与えるエッセイを追加し、改訂第二版のときには、著者が最終稿と考えたテキストでの言い回しを、より分かりやすくする目的で、限られた範囲ではあるが「彼女の〔原稿の〕初阶段階における表現ないし強調の仕方を参考にして」変更までしてしまうのだが⁶⁾。

『人生回顧』には、原典批判版（ないし、それに準じるような新版）は今日まで出されていない。さて、それでは、アンドレアス＝ザロメが『人生回顧』によって、「理解可能」な自己像を打ち立てることができなかったのは、出版された自伝テキストの不備によるのだろうか。原因はおそらく複合的なものである。いずれにしても、アンドレアス＝ザロメのアイデンティティに関する問い（「彼女は何なのか」）に、明瞭な答えを出すことはできないように見える。彼女は、ロシア人なのかドイツ人なのか、作家あるいは精神分析医なのか、哲学者なのか、それとも知的男性の「伴侶」でミューズとなり、

彼らの伝記作家になったのか、20世紀初頭の知的・芸術的領野にすぐにくびを突っ込む「ディレクタント」で、夫を置いて絶え間なく家をあけていた道徳的に非難されるべき女性だったのか。文化、言語、社会層、国家、民族、学問・芸術の諸分野、職業領域、男性・女性、等々、何らかのアイデンティティを表象しうるあらゆる分野について、アンドレアス＝ザロメは境界線上に存在しうるものが、人々の関心を強く引くのだろう。

この小論は、アンドレアス＝ザロメの像を、上述の様々なイメージのどこか一箇所に固定することを目的にしてはいない。そうではなく、彼女の人物像が統一的な形では了解されえない条件について考察し、彼女を例に、あるアイデンティティが「理解可能性」に到達する（または、しない）プロセスについて考えたい。アンドレアス＝ザロメの自己像が理解可能な統一体として表出されない条件・原因の一つは、『人生回顧／輪郭』⁷⁾の語り方と、自伝ジャンルにおける「人生史」の語り方の規範とが、互いにかみ合わない関係にあるからだ、というのが本論のテーゼである。このテーゼを手がかりに、アイデンティティの理解可能性に関連して、自伝テキストと精神分析の関係を研究するための、端緒となる考え方を示したい。

2. 『人生回顧』における「わたし」の理解可能性

1951年に『人生回顧』が発表されたとき、著者アンドレアス＝ザロメは理解可能な一義的人物像を獲得することはできなかった（あるいは、しなかった）。長い間忘却の淵にさらされていた女性作家とはいえ、人々は彼女のことを記憶にとどめており、それなりの期待をもって『人生回顧』を読んだのである。しかし、当時の幾つかの書評を見ると、アンドレアス＝ザロメの様式化された自己表現ないし自己演出といったものは、一般読者の期待を裏切り、がっかりさせていたことが分かる。またそこには、アンドレアス＝ザロメのテキストが抱えている難解さ、構造上の特殊性も指摘されており、この

自伝が今日に至るまであまり広く受容されなかった理由の一端がすでに明示されている。

たとえば、グスタフ・ヒラルトは次のように述べている。「この本を、いささか失望して閉じるとき浮かび上がる問いはこうだ。これほど豊富で意義深い人生についての自己証言に対してなら、高い要求をかかげても良いはずだが、その要求はなぜ満たされないのだろうか。ここに描かれた人生の思い出には、人生史が年代記的に進行する一般的伝記の形式もなければ、一人の創造力あふれる人間が歩んだ精神的道のりを明らかにする、より高度な伝記の形式もない。あるのは、混合的で中間的な形式だ。この回想録は、生きてきた人生を、個々の『体験』章に分割しており、それらの章が、共通の『平面図』、つまり一般的な『基礎部分の輪郭』という、まさに不明瞭で神秘的な概念に関連づけられているのである。」⁸⁾『人生回顧』は、必ずしも連続的・「年代記的」構造を持たず、幼年時代の神消失体験や、初恋の体験など、「体験」ごとの章を並列させており、全編を一貫して流れる物語性は乏しい。伝記にしろ自伝にしろ、「人生史」を描く規範的形式は、「年代記」や「道(Weg)」などの言葉が示唆するように、段階的発展を伴う、最終的には人生全体を統一的に締めくくる高度な到達点を前提とした形式であると、この書評は述べているようで興味深い。『人生回顧』の自伝書法は、規範的形式からのずれがあるために、すでに評価が低く見積もられている。「人生史」を描く規範的形式と、そこで描かれる人物像やアイデンティティの構想は手を取り合っており、「形式」が暗黙のうちに「描かれるべき人生」を決定する——このようなからくりが、不問に付されている点に注目したい。その帰結として当然のことであるが、『人生回顧』はその各章を並列させる構造を通じてどのような（異なる構想に基づいた）アイデンティティを表出しているのか、という視点からの読解はなされない。

「主観的で私的な要素をあきらめないまま、体験を個人的なものから切り離し、一般的なものへと引き上げること」⁹⁾を試みた『人生回顧』であるが、

より具体的な、本人しか知りえない事実の告白等を期待する読者にとって、アンドレアス＝ザロメの抽象度の高く、読みにくい叙述は、その背後に事実隠蔽があるのではないかと想像させる危険も冒している。次の書評にも眼を向けてみよう。「この人生における真の内実を——ここに驚きと失望があるのだが——彼女は主観的にしか捉えておらず、客観的には理解していない。[中略] 客観的な総括はベールに包まれたまま、ほめめかしに終っており、結局のところ未解説である。すなわち、彼女は人を映す鏡、媒体、人の通り道だったのであり、自分自身であるというよりも、他者の人生、特にニーチェとリルケの人生における『登場人物 (Figur)』なのだった。その結果出来上がったのは、自伝 (Selbstbiographie) でも、彼女自身の人生を描く叙事詩でもない。自分の人生であれば、到達したり、できなかったりした様々な目標があったことだろう。実現できたり、できなかったりした着想、夢、希望があったことだろう。しかしここにあるのは、もっぱら『人生における幾つかの思い出の輪郭』に過ぎず、一貫した筋もなしに、何幕か続くドラマである。』¹⁰⁾ アンドレアス＝ザロメが、他者にとっての「鏡」「媒体」「通路」として『人生回顧』に表出されている、という指摘は的確である。それは、『輪郭』全体を通じて徹底したアンドレアス＝ザロメの姿だといえる。この評者はそれをももちろん否定的な意味合いで主張しているのだが、ここにも、「人生」とはどのようなものであるべきか、すなわち、どう「書かれるべきか」という規範が『人生回顧』におけるアンドレアス＝ザロメ像の肯定的受容を妨げている、と見ることができる。他者の鏡であること、そのようなアイデンティティのあり方が、少なくとも「可能性」としてある、ということが、『人生回顧』の受容プロセスにおいては事実上最初から締め出されていると考えられる。

ある自伝テキストの語り手である「わたし」が、どのように「理解可能」となるか、という問題には、本来、複雑に絡み合った様々な局面を考慮することなしに答えることはできない。アイデンティティ、著者性、ジェンダー

に関連する多種多様なイメージと、社会的・歴史的・文化的背景とが、ある一人の人物の「理解可能性」に関わってくるからである。『人生回顧』に対する反応として表れた、自伝作者はその人生を「客観的に」分かりやすく、つまり「理解可能」な形で描くべきだという要求は、一見正当であるように見えるが、実はその要求自体、歴史的・文化的に作られてきたアイデンティティの基準と深く結びついているのである¹¹⁾。年代記的發展を示す「真のわたしの人生史」は、「自然」のように実体化して見えるのだが、実際にはフィクションの物語と同様、言語的構築物にほかならない。ジュディス・バトラーの「アイデンティティ」と「意味づけの実践」に関する次のような考察は、自伝書法、つまり自伝における人生史の語り方についても、重要な視点を提供していると考えられる。

たしかにアイデンティティは、多くの不動な実体詞として現れてはいる。事実、認識論のモデルは、この見せかけを理論の出発点とする傾向にある。だが実体詞としての「わたし」は、その作用を隠蔽し、その結果を自然化しようとする意味づけの実践によって、実体詞と見えているだけなのである。さらに言えば、実体的なアイデンティティの資格をもつことは、なかなか困難なことである。というのも、実体的なアイデンティティのように見えてはいても、それは、規則によって産出されるアイデンティティにすぎないからだ。つまり文化的に理解可能なアイデンティティの実践を条件づけ制限している規則を、たえず繰りかえし発動させることによって得られるアイデンティティにすぎないものであるからだ。実際アイデンティティを、実践——つまり意味づけの実践——と考えることは、文化的に理解可能な主体を、規則によって制限されている言説の結果だと——言語生活の一般的で日常的な意味づけの行為のなかに参入する言説の結果だと——捉えることである。抽象的に言えば、言語とは、理解可能性をたえず作り出すと同時に、理解可能性に

異を唱えることも可能な、開かれた記号体系なのである¹²⁾。

アイデンティティを「意味づけの実践」として捉える、ということ转自伝テキストとの関連で言い換えるならば、事前に実体としてあるアイデンティティが自伝テキストを通じて表象されるのではなく、事態はその逆であり、自伝テキストが「文化的に理解可能なアイデンティティの実践を条件づけ制限している規則を、たえず繰りかえし発動させることによって」アイデンティティを作り出していることになる。規範的自伝における、人生の様々な出来事に関連づけ、年代記的に物語る語り方とは、アイデンティティの実践を条件・制限づけする規則の一部である。『人生回顧／輪郭』の受容は、アンドレアス＝ザロメの書法が、人生史の語りにおける規則に違反しており、そのテキストが表出するアイデンティティの理解可能性が妨げられていることを示している、と考えられる。しかし、同時にアンドレアス＝ザロメのテキストは、「開かれた記号体系」として、なんらかの異なるアイデンティティの理解可能性を作り出しているとも言える。言い換えるなら、例示した『人生回顧』に対する二つの書評は、アンドレアス＝ザロメの書法について実に本質的な指摘を行っていながら、規範からはずれているアイデンティティの理解可能性について、眼を向けようとはしなかったということになる。

3. 周縁化する「わたし」、「媒体」としての「わたし」

——「F.C. アンドレアス」の章を中心に

『輪郭』の本編十章のうち、アンドレアス＝ザロメがもっとも力点を置いた章は「神の体験 (Das Erlebnis Gott)」¹³⁾である。というのも、著者は、幼年時代の体験として最も強い印象を残した神の消失についての思い出を、自伝『輪郭』で扱うよりずっと以前から、エッセイや小説の題材として繰り返し取り上げてきたからだ。「神の体験」については別途詳述する必要がある

ると考えるが、ここでは、この章における語り手の「わたし」の位置についてのみ簡単に触れておきたい。「わたしたちの最初の体験は、注目すべきことに、消失 (ein Entschwind) である。」という一文から始まる「神の体験」は、身体的レベルと心理的なレベルとの区別がはっきりとは言及されないものの、胎児が母胎から切り離され、世界との一体感を消失してこの世に生み出されるイメージを用いながら、主体が避けがたい欠損を前提条件として誕生することを、「わたしたち」という一般化した理論的水準でしばらく描きつづける¹⁴⁾。誕生に伴って世界と世界との間に裂け目が生じると、今度はそれを媒介し、つなごうとするもの（たとえば、子供の世界における想像・幻想など）が生み出される。このような機制が主体一般に妥当することとして提示されたのち、「わたしの場合は (In meinem Fall...)」¹⁵⁾ という形で、ようやくアンドレアス＝ザロメの幼年時代における「神」をめぐるファンタジーについての語りが始まる。ここに出現する「わたし」は、人称代名詞一人称単数主格の ich ではない。「わたし」の物語は、主体誕生の普遍的物語に付随する一つの「(症) 例 = Fall」として語られる体裁をとっている。「わたし」は物語が発せられる中心にはない。

このような『輪郭』における「わたし」の周縁化は、「愛の体験」をはじめとする他の章にも顕著であり、各章の冒頭に ich が用いられることは、「ライナーと共に」の章を除いて、まずない。人称代名詞一人称の三格や四格がまずはじめに現れた後、あるいは「わたしたちの」「わたしの」という所有代名詞が、いわば主語としての「わたし」を含意しつつ用いられた後、ようやく ich の現れる場合が大半である。『輪郭』では、思い出を語る主語／主体は ich ではない。思い出自身が「わたしに」語りかけるのである——あるいは、そのような主客逆転の構図が演出されている。このような書法は、アンドレアス＝ザロメが1910年代から20年以上にわたって、まさに死ぬまで関わりつづけたフロイト派精神分析における認識と、なんらかの関係を結ぶのだろうか¹⁶⁾。

『輪郭』の十番目に位置づけられた「F.C. アンドレアス」という章は、アンドレアス＝ザロメ自身の人生を直接描いたテキストではなく、亡くなった夫の、いわばテキストによる肖像画・遺影として夫の弟子や、友人のために執筆されたものだった。従って、自伝『輪郭』においては副次的な地位の章として、本編の末尾に置かれている。しかし、夫の死はアンドレアス＝ザロメの自伝執筆を促す直接的なきっかけを与えたようであり、著者は『輪郭』の「[第一次] 世界大戦前からその後」と題された章に、その経緯を次のように述べている。「1926年の末、ライナーが、そして1930年10月4日にはわたしの夫が亡くなった。その後間もなく、とても上手には言えないが、夫の横顔（Wesensumriß）を描き出そうとわたしは試みた。その時は、彼の最も近い弟子や友人たちのことだけを考えていた。だから、その文章はあとで別個のものとして扱い、わたしの回想録に補遺として追加したのだが、この回想録といえば、それは夫の亡くなった翌年、日増しに切迫するように、私自身の予測不可能な生の思い出（Lebenserinnerungen）が、私に語りかけてきたことなのである [後略]。」¹⁷⁾

「わたし」を思い出す主体として表象することを一貫して拒絶する態度は、アンドレアス＝ザロメが個々の人生よりも、「生」そのものを思い出の主体として位置づける発想を持っているからだ。「わたし」とは、「生」が（成功するかどうかは別として）その全体性を十全に実現しようとする場所であり、「生」を反映する媒体なのである。上記の引用に続いて、著者はこう記している。「[……] 個人の個々の体験は、私たちが好んでそう思うほど、大切ではない。実生活のどのような部分においてその体験が私たちに割り当てられ、実生活を幸福や苦痛において味わうことになるか、ということは、そう重要ではないのだ。というのも、個別的体験の中身において、もっとも微細で、見たところ無意味なものが、汲み尽くすことのできない何かを指し示すことがありうるのだし、一方、たとえ極めて輝かしい、成功に満ちた体験であっても、その全体像は、私たち人間の目には認識されないままに留まらざるを

得ないからだ。というのも、私たちの目にとって全体像は、だまし絵であるから。つまり、私たち自身を、その公然の秘密である像の中に含めて書き込んでしまっているからだ。』⁽⁸⁾

『輪郭』に収められた各章は、主人公となる「わたし」の体験をドラマチックに描くよりも、著者自身の人生と、著者と深い関わりが生じた人々の人生に対して、同じ視線を投げかけることを目的にしているようだ。つまり、対象となる人物の人生の「全体像」を把握することは最終的にはできないとしても、まったく無意味に見える些細な体験をきっかけとして、その全体像に限りなく近づくことが可能になる場合があるし、また、伝記や自伝にふさわしい華やかな体験を捉えたとしても、そこには同時に存在していながら見落としている、その体験の別の側面があるはずだ、という見方である。アンドレアス＝ザロメの「もっとも微細で、見たところ無意味な」内容を持った体験への注視は、フロイトが『夢判断』をはじめとする著作で無意識の存在を明らかにしようとする際、常に、一見したところ全然無意味で無価値なものに注目したことと軌を一にしている。自伝書法の規範は、個々の出来事の関連性と、時系列的に秩序だてられた物語性を重視していたが、夢のように時間軸を持たない記憶や物語、あるいは、互いの関連性が明らかでない個々の出来事や体験を手がかりに「人生史」を描こうとした場合、どのような形式が可能なのか、という問いを『輪郭』は投げかけている。

「F.C. アンドレアス」という章は、アンドレアス＝ザロメが自分の人生を描いていないという意味では、あくまでも自伝の補遺と理解すべき章であるが、このわずかな十数ページにまとめられた夫の肖像には、アンドレアス＝ザロメの、それまでの伝記作家としての経験と態度が集約されており、ある人生の全体を、肯定的側面および否定的側面のどちらにも分け隔てのない眼差しを向けて描こうとする、伝記作家としての「わたし」が表現されている。その伝記書法における特色の一つは、彼女のニーチェ伝やリルケ伝でも見受けられる手法であるが⁽⁹⁾、対象となる人物が抱え込んでいる二項対立的要素

に注目し、両極のせめぎあいが、その人物の人生および人格にとって、創造性を促進する方向に働いたか、あるいは減退させる結果になったか、という創造性理論に基づいた図式的な理解を出発点にすることである。フリードリヒ・カール・アンドレアスについても、彼の人格に含まれる二項対立的要素の叙述を基礎に、学者、教育者、生活人として、内面の分裂が各領域でどのような影響を及ぼしたかという記述が中心となり、生育歴については言及があるものの、誕生年や没年、アンドレアス＝ザロメと結婚した年など、アンドレアス＝ザロメとの夫婦関係は幾つかのエピソードを除いてほとんど述べられない²⁰⁾。

テキストは、夫の姿を三段階に分けて追う構成となっている。まず第一に（この世代の知識人に特有の、極めて本質主義的な議論の進め方で）アンドレアスの人格に含まれる対立的要素が示され、その要素が彼の西洋的合理的学問での生産性にブレーキをかけたということが述べられる。アンドレアスの母方の祖父は北ドイツ出身の医師で、ジャワに移住した後、マライ人の女性と結婚したことから、祖父母の世代からすでに「西方と東方とが彼の誕生に関与していた」(186)²¹⁾。アンドレアスの母親も、(現在のイランに位置する)イスファハンに居をかまえる領主一門の出のアルメニア人と結婚し、この父親はアンドレアスが六歳のとき、ハンブルクに移住している。アンドレアスは以来、ドイツを中心とする西ヨーロッパでの教育を受けたのだが、アンドレアス＝ザロメによれば、学者としてのアンドレアスには、西欧的合理性と東洋的直感による知恵とが鋭い対立を成しており、研究活動に打ち込めば打ち込むほど「ある限界」(188)にぶつかるのだった。アンドレアスの中にいる「ヨーロッパ人」が、厳格な合理的証明を細部にまで求めるため、ある時点で区切りをつけることができなくなる一方で、彼の中の「東洋の賢者」は、学問的調査よりも早く、内的な証拠を見通してしまっているのだが、この両者が客観的な学問的業績という形で実を結ぶように折り合うことはなかった。

アンドレアスの「知」は、しかしながら、細部を検証しつつ常に「全体」(189)を見極めようとしており、この知を弟子に伝える教育者としてのアンドレアスを描くのが第二の段階である。知識を「生き生きとした体験 (dies lebendig Erlebte)」(190)として伝えられた弟子たちは、いわばアンドレアス自身は成し遂げられなかったこと、つまり、明白なものとして感知し、観察したものと、細部にわたる無限の検証とを、「統一的に」まとめる研究者に成長することができたのである。

アンドレアス＝ザロメの描写に従えば、学問という人生の一領域において、たしかにアンドレアスは内面の分裂を克服できず、調和的な統一の人格に達することはできなかった。しかし、教育者として知識を全人的な知として伝えることができたアンドレアスは、独特な「肉体の存在感 (Leiblichkeit)」(195)をもった人物であり、彼の肉体的存在は、その精神的活動とは切り離せない形で、アンドレアス＝ザロメを含む周囲の人間に強い印象を与えていた。つまり、第三の段階として、アンドレアスは「精神的なもの」と「肉体的なもの」を「引き裂くことはできない形で」(195)統合していた人間として描かれる。

夫の肖像を描く「わたし」の特徴は、すでに他の章に関連しても述べていることだが、まず理論的な水準での「わたしたち」を用い、一般的に一人の人間に潜む対立的要素と創造性の問題について大枠の考え方を示した後、アンドレアスという具体的な対象を上述のような図式的構成に従って描いてゆく。その際、「わたし」はあらかじめ、自分が対象に近すぎるため「一面的」になる危険性は承知しており、完全な人物描写は無理であることが分かっている。そこで、アンドレアスの像を描くにしても、「彼の像の、たとえそれが基本的特長であるにしても、一つの特徴」(186)にあらかじめ絞りたいとしている。伴侶であるがゆえに、適切な距離が取れないことを見越して、描写に制限を設けるという抑制は、この章における語りの特徴である。しかし、この語り方は何らかの「客観性」を保証するためのものなのだろうか。

「F.C. アンドレアス」における語り手の「わたし」の位置に関して、重要な特徴としてあげておかなくてはならないのは、テキストの中に「主観性」と「客観性」とが融合した空間が構築され、両者の区別が判然としない点である。「個人的な距離の近さ（die persönliche Blicknähe）」（186）から、自分は前面に出ずに、対象からもなるべく離れ、アンドレアスの知人や弟子の言葉を引用することで、アンドレアス像を周辺から炙り出すような手法をとる語り手の「わたし」は、アンドレアスを体験した人々の言葉や印象を「客観的」に伝えることに徹しているように見える。しかしながら、「わたし」は、すべての言葉と印象を伝える媒体として存在しており、読者はこの章の末尾にたどり着くと、全てが「わたし」の広く開け放たれた「窓」（197）から見られ、伝えられていたという印象を受ける。「わたし」が対象から距離を取って後景に退くことによって生まれる空間は、「わたし」と「（複数の）他者」の主観性が交流し、アンドレアス像が結ばれる場所である。アンドレアス＝ザロメは、アンドレアス像に関連する間主観性のアスペクトを、ある弟子の言葉をたっぷりと引用する直前に、次のような言葉で述べている。

アンドレアスがかつての弟子たちによってこのように体験されていたことから、私にとってアンドレアスの死はほとんど帳消しになってしまった、ともし私が告白するなら、それは、弟子たちが悲しみ、同情し、惜別の気持ちを持ってくれるから、という意味ではない。私が言わんとしているのは、彼らの体験の中で、アンドレアスの像が、あたかも彼自身がやっと現実になったかのように、ものすごい生気を放って作用しているという、そのことなのだ。（190）

伝記であれ、自伝であれ、人生史を語る作家としてのアンドレアス＝ザロメについては、これまでの研究史においては部分的にしか論じられていなかった。それだけに、アンドレアス＝ザロメの伝記・自伝における語り方を、

「分かち合う人生史 (shared life narratives)」という言葉で定式化したボスの研究は注目しておかなくてはならないだろう²²⁾。ボスは、主体と客体の分離がなくなり、一つの声、一人の著者によってではなく、複数の声で語られる人生史という意味で、このような定式化を行い、この語り方とアンドレアス＝ザロメのナルシシズム、創造性、女性性に関する論考との関連性を示唆している²³⁾。ボスはその際、アンドレアス＝ザロメの伝記における語りでは、語り手が対象の背後に「自己を喪失して」「消え去る」²⁴⁾と述べているが、この点についてはさらに議論が深められるべきであろう。つまり、「自己」や「アイデンティティ」という概念にあらたな光を当てなおし、アンドレアス＝ザロメの語り方における「媒体」として存在する「わたし」に、別種の「自己」ないし「アイデンティティ」のありかたを見出せないか、という問題が残るのである。

「F.C. アンドレアス」をはじめとする『輪郭』テキストにおける「わたし」の位置を理解する一つのモデルとして、アンドレアス＝ザロメがフロイト精神分析における「無意識」をどのように理解し、実際の精神分析治療にあたっていたか、という点を考慮する必要があると思われる。『輪郭』に取り組み始めたのと同時期に、アンドレアス＝ザロメはフロイトの七十五歳の誕生日を記念した公開書簡として『フロイトへの私の感謝』という著作を発表している²⁵⁾。これは、フロイトを賞賛するだけでなく、彼の主要な諸理論を批判的に解説する趣きをもった本である。その第二章は「転移」というテーマに当てられている。転移とは、主として精神分析治療において、患者がその神経症の原因となった出来事や人物像を、分析医を相手に再現させる現象であるが、この第二章冒頭でアンドレアス＝ザロメは次のように述べている。

この最もすばらしい職業について、あなたは医師としてこうおっしゃいました。

「患者はいつも正しいのです。——病気自体は、患者にとって軽蔑す

べきものであってはなりません。むしろ好敵手となればよいのです。それは患者の本質の一部であり、良き動機に基づいているのですし、肝心なのは、そこから彼のその後の人生のために価値あるものを引き出すことなのです。」この言葉は、患者が空虚のど真ん中に立たされているように感じるあの孤独を取り除いてくれます。そして患者から恥ずかしいことなのではないかという誤解を取り去り、人間と人間との触れ合いを作り始めるのです。この言葉は人間同士の触れ合いを、人間性の平等という土台の上に築くのであり、だからそれ故に、同時に個人的な結びつきという意味ではいかなる接触も否定するのです²⁶⁾。

精神分析治療での医師と患者との関係を、アンドレアス＝ザロメは、人間のつくりとしては誰もが同じである、という原則に基づいたものとしてとらえており、そこには各人の個性や個別性を度外視する態度が見てとれる。厳密に言えば、患者の側は、まず個人的な関係から出発し、「転移」によって医師に対する賛否の感情をぶつけるのだが、分析医はそれがどのような感情であれ、まずは「洋服掛け」のように自分にかけさせてやる。そして、転移を二つの方法で実際の治療に生かしていくのだが、まず一つは、抑圧から浮き上がってきた「思い出」を手がかりにすることであり、第二は患者の賛否の行動によって、間接的に何が抑圧されているかを知ることである²⁷⁾。分析治療の過程で、患者が自分の内部への洞察を深めてゆくことで、医師と患者は「無意識における諸関連の探求」という共同の作業にとりかかることができるのだが、それはつまり、「両者にとって、ようやく明らかとなるもの」を探求することにほかならない²⁸⁾。

「F.C. アンドレアス」の章に見られるように、一つの人生史に対する語り手のスタイルとして、アンドレアス＝ザロメは、「転移」を受ける側、つまり相手の否定的側面も肯定的側面も、同様の価値をもったものとして引き受け、反映する分析医の態度を模しているのではないか。『輪郭』における

「わたし」の位置について理解するヒントがここにあるように思われる。分析医は、患者の「思い出」を手がかりに、患者の無意識への通路を見出そうとするのだが、『輪郭』の「わたし」は、自分自身に対して、無意識への手がかりである「思い出」を手渡そうとしている。したがって、『輪郭』における「わたし」の位置は、医師と患者の立場に分裂している、あるいは、両者の立場に二重化している、というべきかもしれない。

4. おわりに

アンドレアス＝ザロメの『人生回顧／輪郭』は、評価の大きく分かれるテキストであり、今回その一部を読むことによって、何らかの意味ある評価の地平があるかどうかを確認したかった。「理解可能性」というキーワードで見ると、『人生回顧／輪郭』は、作者の人物像を分かりやすく統一的に示そうという企図はなく、他者の人生を描く「伝記的」テキストと、自分の人生を描く「自伝的」テキストの複雑な混合からなっており、「人生史」という共通項の上に、著者自身と、彼女を取り巻く人々、そして究極的には普遍的人類の、様々な人生・性格描写を取り込んだテキスト群である。これらテキスト全体を視野に入れて、「わたし」として現れるアンドレアス＝ザロメのアイデンティティを一言で表することは今の時点ではできない。しかしながら、規範的な人生史を前提とした読み方では、取り逃がすことになる主体像があることは確かである。

『人生回顧／輪郭』は、あきらかにフロイト派精神分析とアンドレアス＝ザロメとの深い関係を示唆する言説を含んでいながら、これまでその語り方に関して、精神分析との関連から説明を加えることはほとんどなされていなかった。精神分析の理論体系は、フロイトが精神分析運動を展開するうちに発展し、変化した部分があり、いったい何をもって「精神分析と自伝書法との相互関係」を叙述できるか、十分に考慮すべき点が多々ある。今回は指摘

するだけに留まった点も多いが、時系列による発展性を前提にした人生史というモデルに対して、一つの記憶、夢、体験を掘り下げることによって成立する人生史というモデルが、フロイトの著作にすでに見られるのではないかと、また、アンドレアス＝ザロメの『人生回顧／輪郭』に特殊性があるとすれば、そうした第二のモデルが試みられているからではないか、という点は、今後の考察の端緒としたい。また、アンドレアス＝ザロメの精神分析における独自の立場を明らかにし、人間や無意識に対峙する彼女の「媒体」としての自己演出について調査することで、「理解可能性」に到達していないアンドレアス＝ザロメ像を新たに引き出すことができるのではないかと考えている。

※本稿執筆にあたり、2003年度～2006年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)、研究代表者：東京大学・松浦純教授、研究課題名：文学表現と〈記憶〉—ドイツ文学の場合）の交付を受けております。

《注》

- 1) 象徴的な例を一件だけ挙げておく。1988年に初版が出され、改訂第二版が1990年に出版されたルー・アンドレアス＝ザロメ伝は、副題に『生の根源』から精神分析へ」とあり、著名男性と交友があった作家としての側面だけでなく、後半生を精神分析の研究と治療の實踐に捧げた学究の徒としての側面にも光をあて、精神分析におけるアンドレアス＝ザロメの諸論文にも目配りがきいていた。それまでの「運命の女」ないし「ミューズ」としてのアンドレアス＝ザロメ像に一石を投じた形である。しかし、同書がもともとなった2002年刊のペーパーバック版の副題は「どれほどお前を愛しているか、謎に満ちた生よ」となっており、アンドレアス＝ザロメの「作品・著作」よりも「生き方」を評価する他の多くの伝記と同様の傾向が顕著になり、彼女の人生を今一度神秘化する方向に転じている。Vgl. Welsch, Ursula; Wiesner, Michaela: Lou Andreas-Salomé. Vom „Lebensurgrund“ zur Psychoanalyse. 2., durchgesehene Aufl. München; Wien: Verlag Internationale Psychoanalyse, 1990. (1. Aufl. 1988); Wiesner-Bangard, Michaela; Welsch, Ursula: Lou Andreas-Salomé. „... wie ich Dich liebe, Rätselleben“. Leipzig: Reclam, 2002.
- 2) Grundrißという単語は、建築における「平面図」「見取り図」という意味のほかに、「概要」「概説」「アウトライン」「輪郭」等の意味がある。アンドレアス＝ザロメは、自伝『人生回顧』において、選び抜いた幾つかの思い出について、そ

の骨子を明らかにしようとしている。言い換えるならば、本質的に重要でない判断した部分、または語りえないと判断した部分があるということを、あらかじめ前提しているとも考えられる。本論では Grundriß の訳語として、建築物の土台部分のイメージと「概説」の意味をかね合わせるつもりで、「輪郭」を充てた。

- 3) Andreas-Salomé, Lou: Lebensrückblick. Grundriß einiger Lebenserinnerungen. Aus dem Nachlaß hrsg. von Ernst Pfeiffer. Zürich: Max Niehans; Wiesbaden: Insel, 1951.; 1951 年版の目次は以下の通り。(各章の番号は、広沢がつけたもの。また、7a および 8a が、『輪郭 (Grundriß)』に本来属さない増補部分である。): 1. Das Erlebnis Gott, 2. Liebeserleben, 3. Erleben an der Familie, 4. Das Erlebnis Rußland, 5. Freundeserleben (Paul Rée und Friedrich Nietzsche), 6. Unter Menschen, 7. Mit Rainer, 7a. Nachtrag: „April, unser Monat, Rainer —“, 8. Das Erlebnis Freud, 8a. Nachtrag: Erinneretes an Freud, 9. Vor dem Weltkrieg und seither, 10. F. C. Andreas, 11. Was am „Grundriß“ fehlt. なお、プファイファーは第一章 Das Erlebnis Gott について、別の原稿が見つかったとして、あらたな底本に基づいて 1968 年に第二版を出版している。しかしながら、厳密な校訂の過程は第二版の編者あとがき等でも明らかにされていない。
- 4) Sigmund Freud. Lou Andreas-Salomé. Briefwechsel. Hrsg. von Ernst Pfeiffer. 2. überarbeitete Auflage. Frankfurt/M.: Fischer, 1980 (1966). S. 215. ([Göttingen] 4. 5. [19]32).
- 5) 『輪郭』草稿の詳しい成立過程については、以下の論文を参照のこと。Michaud, Stéphane: Zensur und Selbstzensur in Lou Andreas-Salomés autobiographischen Schriften. Zur dichterischen Gestaltung des „Lebensrückblicks“. In: Brockmeier, Peter; Kaiser, Gerhard R. (Hrsg.): Zensur und Selbstzensur in der Literatur. Würzburg: Königshausen und Neumann, 1996. S. 157-171.
- 6) Andreas-Salomé, Lou: Lebensrückblick. Grundriß einiger Lebenserinnerungen. Aus dem Nachlaß hrsg. von Ernst Pfeiffer. Neu durchgesehene Ausgabe mit einem Nachwort des Herausgebers. Frankfurt/M.: Insel, 1974. [1951, 1968] S. 312. [Nachwort zur neuen Ausgabe von E. Pfeiffer, 1967] 以後、この版からの引用は、略号 LRB にページ数を記す。
- 7) 以下、本論において『人生回顧』と表記する場合は、プファイファー版の(注釈を含む)本全体を意味しており、『輪郭』と表記した場合にはプファイファーの増補部分(上記注3の、7a と 8a)を除く全十一章の本文を主として念頭に置いている。しかし『輪郭』の決定稿が厳密に確定されているわけではないので、この表記は便宜的なものである。
- 8) Hillard, Gustav: Lebensbücher zweier Frauen. In: Merkur. 6. Jg. 1952. S. 1183-1185. Hier S. 1183.

- 9) Ebd.
- 10) Anonym (signiert als „-se“): Von Nietzsche bis Sigmund Freud. In: Die Gegenwart. 7. Jg. 1952. S. 84-85. Hier S. 85.
- 11) Vgl. Goethe, Johann Wolfgang: Dichtung und Wahrheit. Bd. 1. Frankfurt/M.: Insel, 1975. S. 9f. ゲーテの『詩と真実』の冒頭には、いわゆる「友人の手紙」が紹介されている。この「友人」は、ゲーテの十二巻本全集の作品は互いに「関連性がない」ので「作者の一つの像」を作ることが難しいと述べ、作者の人生と創作過程とを「年代記的順序で」「ある程度の関連性を持たせて」あらたに書き直して欲しい、とゲーテに要請している。
- 12) ジュディス・バトラー（竹村和子訳）『ジェンダー・トラブル』青土社 1999 年、254 頁。
- 13) 『人生回顧／輪郭』各章の題名については、注 3 を参照のこと。
- 14) LRB（注 6 を参照のこと）S. 9-25. Hier S. 9ff.
- 15) Ebd. S. 11.
- 16) アンドレアス＝ザロメは五十歳の誕生日を迎える 1911 年に精神分析に出会ったとされている。1897 年以来的の Rilke との交際において、Rilke の精神状態に危機感を抱いていたアンドレアス＝ザロメは、医学や心理学の勉強に携わる間、Hermann Swoboda の著作において精神分析を示唆する箇所にはじめてぶつかった。その後、1911 年ワイマールで開催された第三回精神分析会議に参加し、1912 年 9 月にはフロイトに、ウィーンの彼のもとで勉強する許可を請うため手紙を出している。フロイトの招待を受け、1912 年から 13 年にかけての冬学期、アンドレアス＝ザロメはウィーンに赴き、大学および「水曜会」において、直接フロイトとその側近たちと交流を深め、専門的議論に参加している。アンドレアス＝ザロメは以後、ドイツにおける最初の、いわゆる素人分析医（医師ではない精神分析医）の一人として患者の治療にあたった。彼女の死まで続いたフロイトとの文通は、理論上の問題や、患者治療の実際に関してフロイトに助言を求め、研究と治療に持続的に取り組んでいたアンドレアス＝ザロメの姿を克明に伝えている。
- 17) LRB, S. 183. [„Vor dem Weltkrieg und seither“] 強調は原文のとおり。
- 18) Ebd.
- 19) アンドレアス＝ザロメは、精神分析と出会うはるか以前に、ニーチェの人と作品についての伝記的研究を著し、事実上この作品で作家として注目されはじめた。また、Rilke の死後まもなく発表した Rilke 伝には、精神分析理論の言説がはつきり読み取れる。アンドレアス＝ザロメは、ニーチェは心理的に「主体的本質と奴隷的本質」という対立項を抱え込み、「彼の本質の、より高い次元における統一」はできずに内的な分裂に陥ったと論じ、また、Rilke については、「人生と芸術」の対立関係が Rilke の精神を激しく消耗させ、芸術的成功と人生における

- 幸福感とが、リルケにおいてはついに一致することがなかったと考えた。Vgl. Andreas-Salomé, Lou: Friedrich Nietzsche in seinen Werken. Mit Anmerkungen von Thomas Pfeiffer. Hrsg. von Ernst Pfeiffer. Frankfurt/M.: Insel, 1983 (1894); Andreas-Salomé, Lou: Rainer Maria Rilke. Mit den Photographien der Erstausgabe. Hrsg. von Ernst Pfeiffer. Frankfurt/M.: Insel, 1988 (1928).
- 20) 東洋学者 Friedrich Carl Andreas は、1846 年 3 月 14 日、今日のインドネシア・ジャカルタにあたる Batavia で生まれ、1930 年 10 月 3 日、ドイツ・ゲッティンゲンで亡くなっている。ベルリンで知り合った十五歳年下のルー・フォン・ザロメ（当時二十六才）と結婚したのは 1887 年である。Vgl. Welsch, Ursula; Wiesner, Michaela: Lou Andreas-Salomé. (注 1 参照のこと)
- 21) 以後、「F. C. アンドレアス」からの引用は、LRB のページ数を直接本文の括弧（ ）内に示す。
- 22) Bos, Jaap: Shared life narratives in the work of Lou Andreas-Salomé. In: The International Journal of Psychoanalysis. 5 June 2000, vol. 81, no. 3, pp. 471-481.
- 23) Ebd. S. 477.
- 24) Ebd. S. 475 und 478.
- 25) Andreas-Salomé, Lou: Mein Dank an Freud (1931). In: dieselbe: Das „zweideutige“ Lächeln der Erotik. Texte zur Psychoanalyse. Hrsg. von Inge Weber und Brigitte Rempp. Freiburg i. Br.: Kore, 1990. S. 245-324.
- 26) Ebd. S. 247.
- 27) Ebd. S. 247f.
- 28) Ebd. S. 248.

(ひろさわ・えりこ 商学部教授)